

## 巻頭言

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会  
第12期ゼミ長 梶田 伸吾

長く、そして険しい道のりだった。これまで、目の前に聳え立つ高い山を前に、幾度となく足が竦んだ。しかし、今、ここから見渡す景色は、なんと奇麗なものだろう。あんなに高いと感じた山々が、今となっては小さく見える。胸いっぱい深呼吸してみると、空気は限りなく澄んでいる。ふと隣に目を向けてみると、凜とした顔つきで静かに佇む同志がいる。こんなにも素晴らしい情景に出会うことになろうとは、きっと想像もできなかった。今ここに、『慶應マーケティング論究』という名の論文集が、完成した。この論文集には、慶應義塾大学商学部小野晃典研究会第12期生一人ひとりが、一生懸命もがきながらも何とか完成させた15篇の卒業論文をはじめ、チームを結成して取り組んだ三田祭論文や、国外の著名な学会で発表し喝采を博した英語論文などが収められている。

これまでの小野晃典研究会での活動は、山登りに例えることができよう。私達第12期生は、小野晃典研究会という、商学部の中でも群を抜いて高い山を目指す、巷では「エグゼミ」と呼ばれる研究会に入会した。小野晃典研究会に入会した理由は、各々によって異なるであろうが、少なくとも私は、先輩方の「カッコよさ」に惹かれて入会した。「カッコよさ」とは、何とも曖昧な言葉であるが、それは先輩方の自信に満ちた表情や立ち振る舞い、後輩を気遣う紳士な姿勢など、これら全てを総称した言葉と言って良いだろう。自分もあんなに「カッコいい」人間になりたいと思ったのである。きっと、私と同じ理由で入会した同志も多いことであろう。そして入会直後、「よし登るぞ！」と意気揚々と歩み出そうとする私達に、先輩方から「待た！」の一言。そんな無防備な格好では、これから登る山には到底歯が立たないというのである。実際、当初の私達は、山登りに必要となる基礎体力も強靱な精神力も、身を守る上等な装備も持ち合わせていなかった。そこで私達は、それらを手に入れるべく、基礎文献レポートの作成や多変量解析技法の学習をはじめ、ケース・メソッドやディベートなど、日々の活動に全力で取り組んでいった。もちろん、これまでろくに山登りの準備すらしたことのない私達が、最初からこれらのことを全て上手くこなせるはずがない。一つひとつの活動に、微力ながらも全力を出して果敢に挑んだが、先輩方からは厳しいフィードバックを頂いた。時には、「何度言ったら分かるんだ！」と罵倒されることもあった。心が折れそうになることもあった。しかし、私達は決して諦めなかった。「もうダメだ」と言おう者がいれば、その度に、「全員で頂上まで登るぞ、今はその準備段階なのだから頑張ろう」と説得した。

こうして、地道に山登りの準備をしていった私達は、いよいよ論文執筆活動を開始した。山登りが始まったのである。しかし、その道のりは想像以上に厳しかった。仮説がなかなか定まらず、四苦八苦した。仮説がやっとのことで決まっても、それを支える理論がなかなか見つからないこともあった。論文執筆という「創造的活動」の難しさを改めて実感したのであった。しかし、苦しいことばかりだったのかと言われ

れば、そうではない。論文執筆活動を通して、学問を探究することの楽しさも実感することができた。一学生でしかない自分達が、大物学者たちの立派な仮説に対し、問題点を指摘し代替案を案出できた時、何とも形容し難い大きな喜びが、心の底から湧き上がってくるのを感じることができた。

このような経験を経て、私達は少々遠回りしながらとうとう頂上までやってきた。この論文集が完成に至るまでの間、本当にたくさんの方々に支えられた。私達の論文執筆活動を支えて下さった方々に、この場を借りて、誠意を込めて感謝の意を述べたい。

まずは、同研究会第13期の後輩の皆へ。君達との出会いがなかったら、私達はここまで成長することはできなかったように思う。私達は、君達への指導を通じて、自分達の無力さを知った。表向きには先輩づらをしながらも、その裏では「カッコいい先輩」になろうと必死になってもがいてきた。この論文集を完成させることができたのは、君達の存在があったからこそだと思う。本当にありがとう。

次に、同研究会第11期の先輩方へ。先輩方が時に厳しく、時に優しく指導して下さったおかげで、入会当初はあんなに無防備だった私達も、大いに成長し、なんとかここまでやってることができた。今振り返ると、いつも先輩方の偉大さを実感し、それを凌駕しようという思いがあったからこそ、どんなに厳しい状況も乗り越えることができたように思う。本当にありがとうございました。

さらに、大学院生の菊盛真衣さん（第7期OG）、白石秀壽さん（第9期大学院生）、竹内亮介さん（第9期OB）、石井隆太さん（第10期OB）、中村世名さん（第10期OB）、王皓瑩さん（第10期大学院生）、廖舒忻さん（第11期大学院生）へ。大学院生の皆さんが、いつも私達学部生に寄り添い、丁寧に指導して下さったおかげで、幾度もピンチを乗り越えることができたように思う。皆さんの存在がなかったら、間違いなくこの論文集は完成しなかったと思う。本当にありがとうございました。

そして、家族へ。論文執筆活動に没頭するあまり、きっと多くの心配をかけてしまったことだろう。それでも、家に帰るといつもありったけの優しさで包み込んでくれた。温かい家族の存在があったからこそ、この論文集を完成させることができた。本当にありがとうございました。

最後に、慶應義塾大学商学部教授の小野晃典先生へ。卒業を目前にして、これまでの活動を思い出しながら改めて、『三色旗』第643号に寄稿された「新米教師」という名の、小野先生のエッセイを読んだ時、思わず息を呑んだ。そこには、こう記されていた。「少し前までは自分の研究努力の結晶である論文を最大の宝にしていた私は、教師になって新たな宝を得た。それは、私を先生と呼ぶ学生たちの手による論文やレポートであり、彼ら自身であり、また、彼らのお酌する居酒屋の美酒である」。小野先生のゼミ生への愛が満ち溢れているこの文章を読んで、気づいた。私達は小野先生の「宝」なのだと。なぜ小野先生がこれほどまでに熱心にご指導して下さるのか、なぜ私達ゼミ生のプライベートな相談にまで親身になって乗って下さるのか、なぜあれほどまでに居酒屋での私達のお酌を喜んで下さるのかが、改めて分かったような気がした。先生、私達は先生の「宝」であるということを、何よりも誇りに思います。先生に教わったことを、一生忘れることはありません。本当にありがとうございました。

2016年3月吉日